



月に名前を残した？大阪人：佐伯恒夫・宮森作造

右は、出版社に勤める知人の山口正樹さんが、初心者用の機材で撮影した写真です。月のフチの地形に、なんと日本人の名前が入っています。

グリマルディクレーターの中に「佐伯クレーター」その上に「ミヤモリ谷」とありますね。

実はこのお二人の名前は、昭和に活躍した大阪の天文家の名前なのです。小型の望遠鏡で撮影できる地名に、大阪人の名前が！というのはなかなか盛り上がることなので、ちょっと解説してみましょう。



火星にも名がついている佐伯恒夫さん(さへき・つねお：1916年～1996年)

佐伯恒夫さん(写真、右端)は、大阪市立電気科学館の天文担当職員でした。つまり私の大先輩です。そして、佐伯(Saheki)の名前は、実は2006年に「火星の」クレーター名になっています。日本人としては初の快挙でした。広島のアマチュア天文家、佐藤健さんの推薦によるもので、国際天文学連合(IAU)にきちんと認められた、正式なものです。いっておきますが単にプラネタリアムの担当ならクレーター

の名前になるわけではありません。佐伯さんは、アマチュア火星観測者として国際的にも著名だったのです。50年にも渡る継続観測をし、火星面の閃光現象をとらえるといった実績もあり、それが評価されての命名でした。

さて、佐伯さんは観測報告を通じて、戦前から海外ともつなが



りが深く、特に英国天文協会 (BAA)には頻繁に報告を寄せていました。そうした中で、BAAのウィルキンス氏とパトリック・ムーア氏は、彼らが作製した月の本 (The moon; a complete description of the surface of the moon 大型の月面地図付き) に、Saheki (佐伯) クレーターを表記したのです。これはよく使われた本だったために、佐伯クレーターの名前が広がりました。

宮森作造 (1891年～1976年) さんのミヤモリ谷発見

また、佐伯さんは、宮森作造 (1891年～1976年) さんが見たという谷について報告しています。宮森さんは東亜天文学会の理事長もつとめた天文家です。彼が1936年4月5日の夜にグリマルディB (実はこれが佐伯クレーター) の近くに明らかに谷を発見したとあり (実は別の人が発見していて再発見)、これで「ミヤモリ谷」と呼ばれるようになったのです。見るのがちょっと難しいので天文ファンのチャレンジ対象として有名になりました。

宮森さんは教育者として、大阪女学院短期大学教授もつとめられた方ですが、一般向けのやさしい星座の話の紹介や、星座早見 (写真) の著者として知られていました。



幻の？ 佐伯クレーターとミヤモリ谷

ところで、天体の地名は国際天文学連合 (IAU) が管理しています。火星の佐伯クレーターもIAUが命名しました。ところが、月の佐伯クレーターとミヤモリ谷は、正式なものにならなかったのです。

佐伯クレーターは、BAAのウィルキンス氏らによって1948年～1955年に渡り、IAU総会で提案された96の新月面地名候補に入っています。しかし1961年にIAUが規定したクレーター地名の規約では「亡くなった方に限る」とあり、健在だったお二人の名前はつけられることがなかったのです。佐伯クレーターはグリマルディクレーターの中にあるので、正式にはグリマルディBと呼ばれています。ミヤモリ谷については、やはり1961年規約で、近隣の著名なクレーターの名前を取るとあり、これも幻となったのでした。しかし、海外の著名な天文家が大阪の二人を尊敬し、プッシュしたことは間違いないことなのです。

渡部 義弥 (科学館学芸員)